新型コロナ後遺症（罹患後症状）の
実態調査における比較（第１回と第２回）について

調査の概要

1 対象者

区　分	第1回実態調査	第2回実態調査
患者発生時期	R2.3月～R3.10月	R4.1月～8月
抽 出 数	2, 025人	2,623人
調査期間	R3.12.10～12.24	R5.2.1～2.14
主 流 株	アルファ株, デルタ株	オミクロン株(BA.1, BA.2, BA.5)

2 回答率

47. 1% → 27. 7%↓

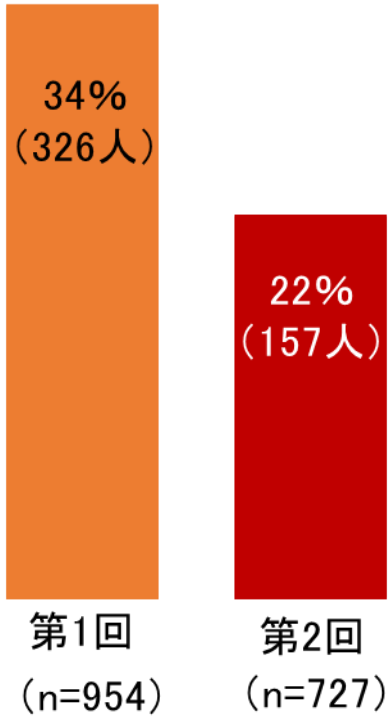
年代	第1回実態調査			第2回実態調査		
	回答数	回答率	構成率	回答数	回答率	構成率
全体	954人	47. 1%		727人	27. 7%↓	
10歳未満	56人	47. 9%	5. 9%	92人	24. 3%↓	12. 7%
10代	77人	35. 5%	8. 1%	77人	24. 0%↓	10. 6%
20代	79人	23. 6%	8. 3%	58人	14. 9%↓	8. 0%
30代	61人	37. 4%	6. 4%	92人	25. 8%↓	12. 7%
40代	97人	44. 1%	10. 2%	108人	31. 8%↓	14. 9%
50代	113人	55. 9%	11. 8%	77人	28. 9%↓	10. 6%
60代	191人	67. 0%	20. 0%	96人	48. 0%↓	13. 2%
70代	217人	65. 0%	22. 7%	82人	44. 8%↓	11. 3%
80歳以上	63人	41. 4%	6. 6%	45人	23. 8%↓	6. 2%

後遺症の有無と社会生活への影響

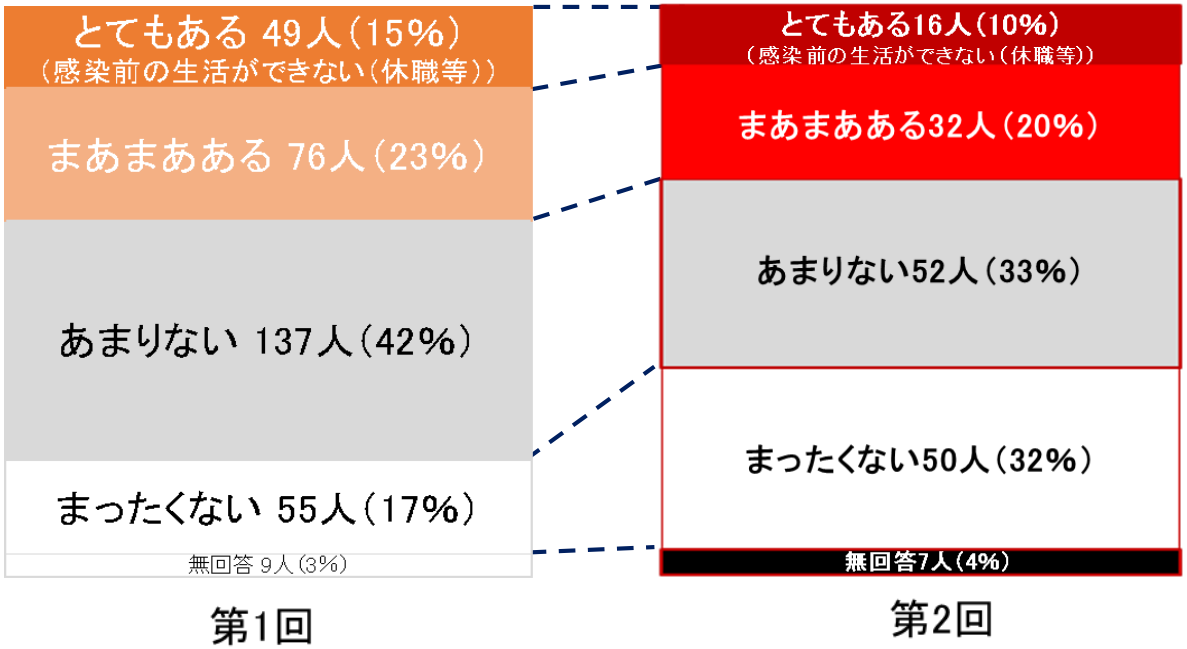
○ 後遺症がある方の割合は，第1回調査が全体の34%で，第2回調査では全体の22%と，第1回調査と比べ，第2回調査の方が低い結果であった。

○ 後遺症がある方のうち，社会生活への影響は，「とてもある」が15%（第1回）から10%（第2回）に，「まあまあある」が23%（第1回）から20%（第2回）へ減少する結果であった。

【後遺症ありの割合】

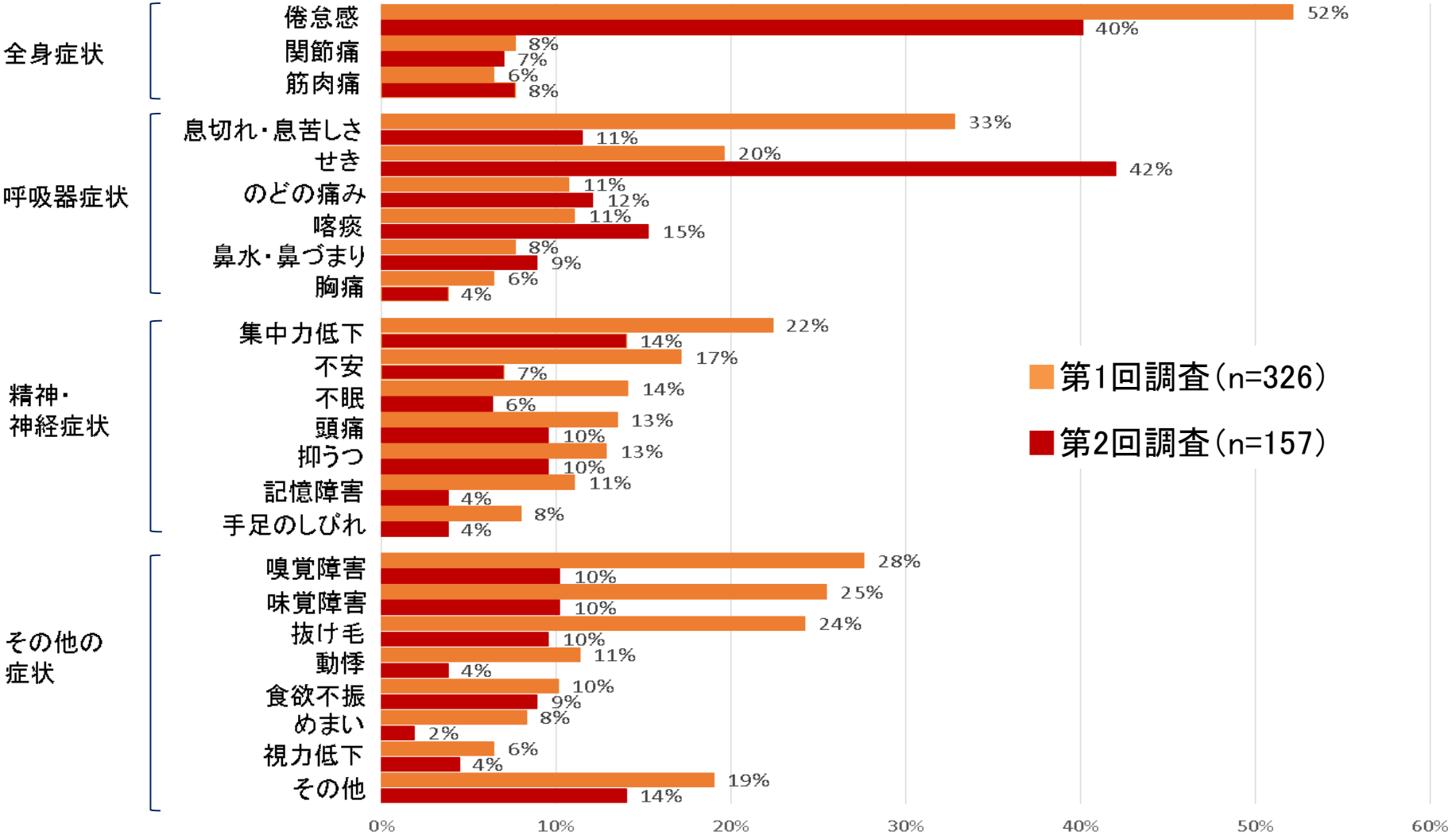


【社会生活への影響】



後遺症の症状①

○ 後遺症の症状は，第2回調査の方が呼吸器症状を感じる方の割合が高く，それ以外の症状については，第1回調査の方が高い結果であった。



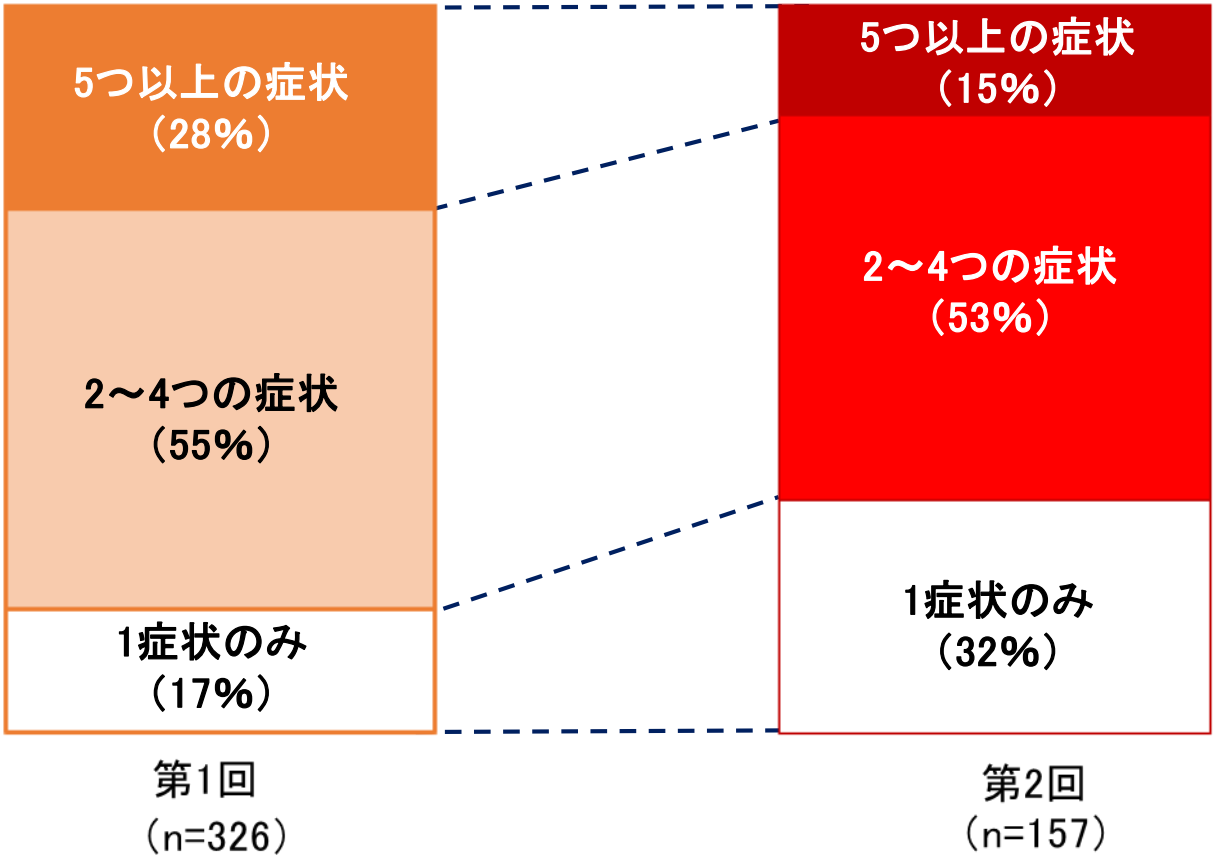
※ その他 ： 目や口の乾燥，目の充血，腹痛，，パニック発作，下痢 等

後遺症の症状②

○ 後遺症の症状数は，両調査で「2～4つの症状」を感じる方が最も多い結果であった。

○ また，第2回調査は，第1回調査と比べ，後遺症の症状を複数感じる方の割合は減少する結果であった

【１人に認める症状の数】



最もつらいと感じる症状

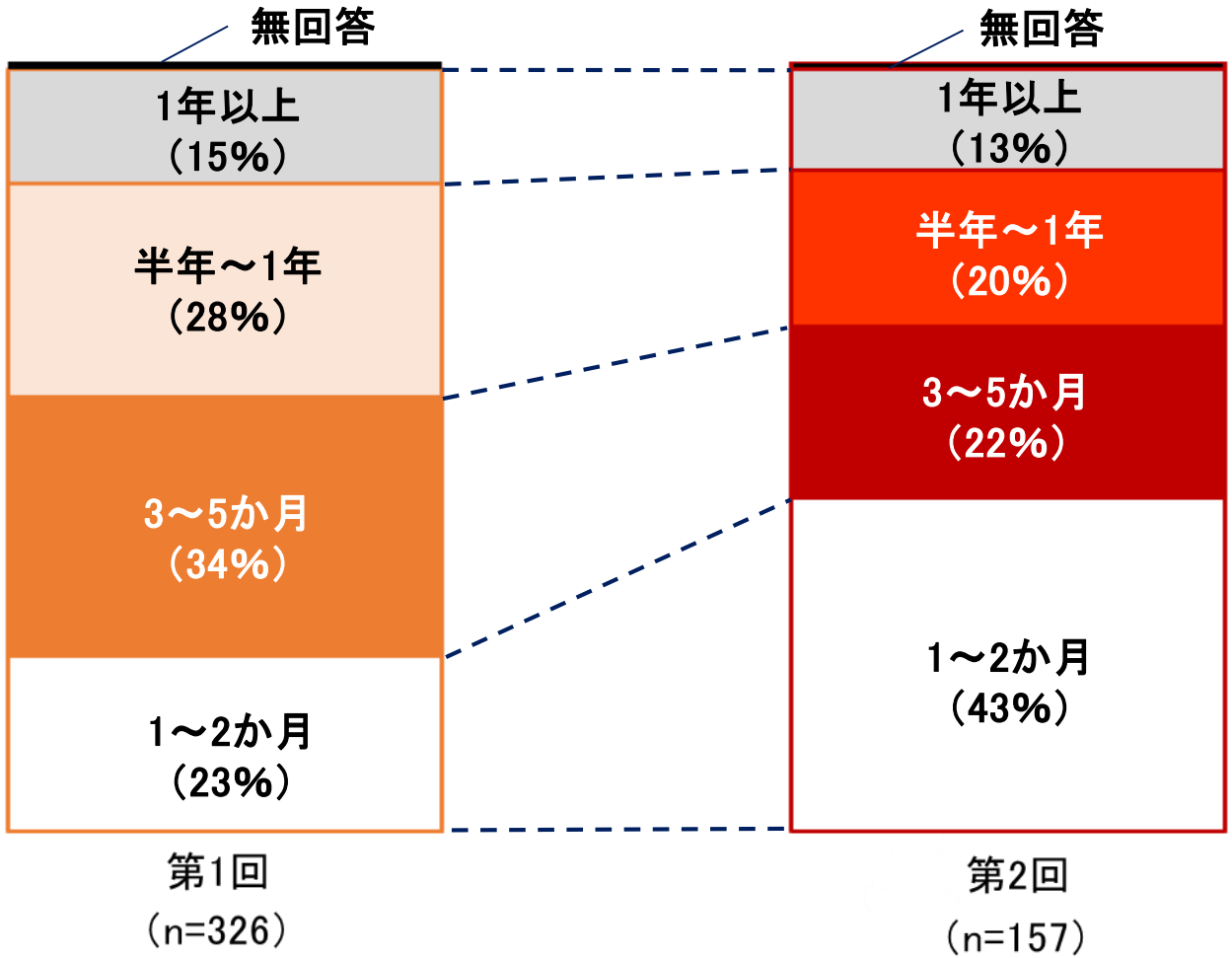
○ 複数の症状の中で，最もつらいと感じる症状は，両調査で「倦怠感」，「せき」と回答する割合が高かった。

順　番	第1回実態調査（n＝326）		第2回実態調査（n=157）	
	症　状	割　合	症　状	割合
1位	倦怠感	20%	せき	32%
2位	息切れ・息苦しさ	13%	倦怠感	20%
3位	せき	10%	味覚障害	5%
4位	嗅覚障害	10%	抜け毛	5%
5位	味覚障害	6%	喀痰	4%
6位	抜け毛	4%	頭痛	4%
7位	集中力低下	4%	息切れ・息苦しさ	4%
8位	手足のしびれ	3%	鼻水・鼻づまり	3%
9位	頭痛	3%	嗅覚障害	3%
10位	抑うつ	3%	集中力低下	3%

（上位10位まで）

後遺症の持続期間

○ 後遺症の持続期間は，１年以上続く方は，同程度であったが，第１回調査と比べ，第2回調査の方が持続期間が短い方の割合が高い結果であった。

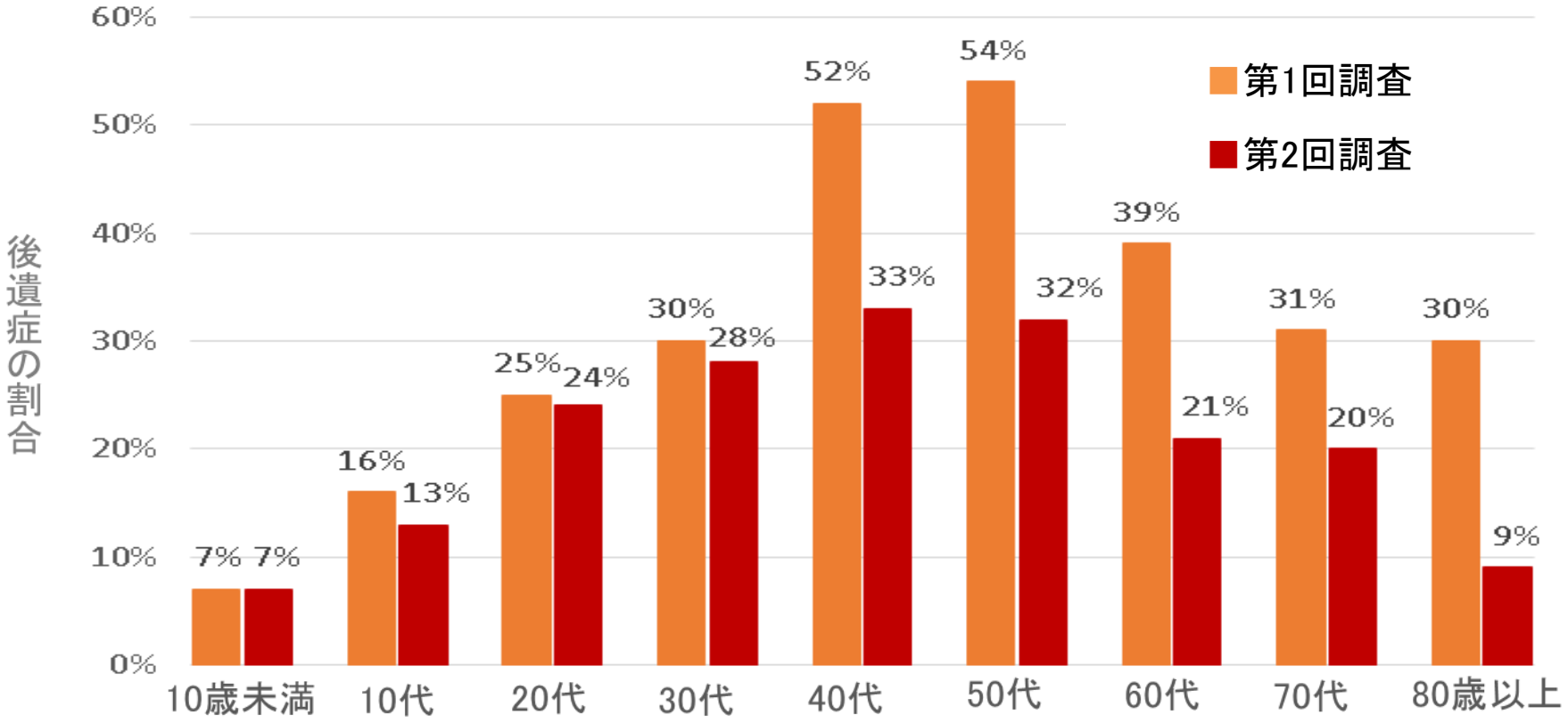


※「現在も続いている」方の調査時点での経過期間を後遺症持続期間として集計

年代別の後遺症の割合

○ 後遺症がある方の割合は，若年層は同程度であったが，40歳以上の方は，第1回調査に比べ，第2回調査の方が低い結果であった。

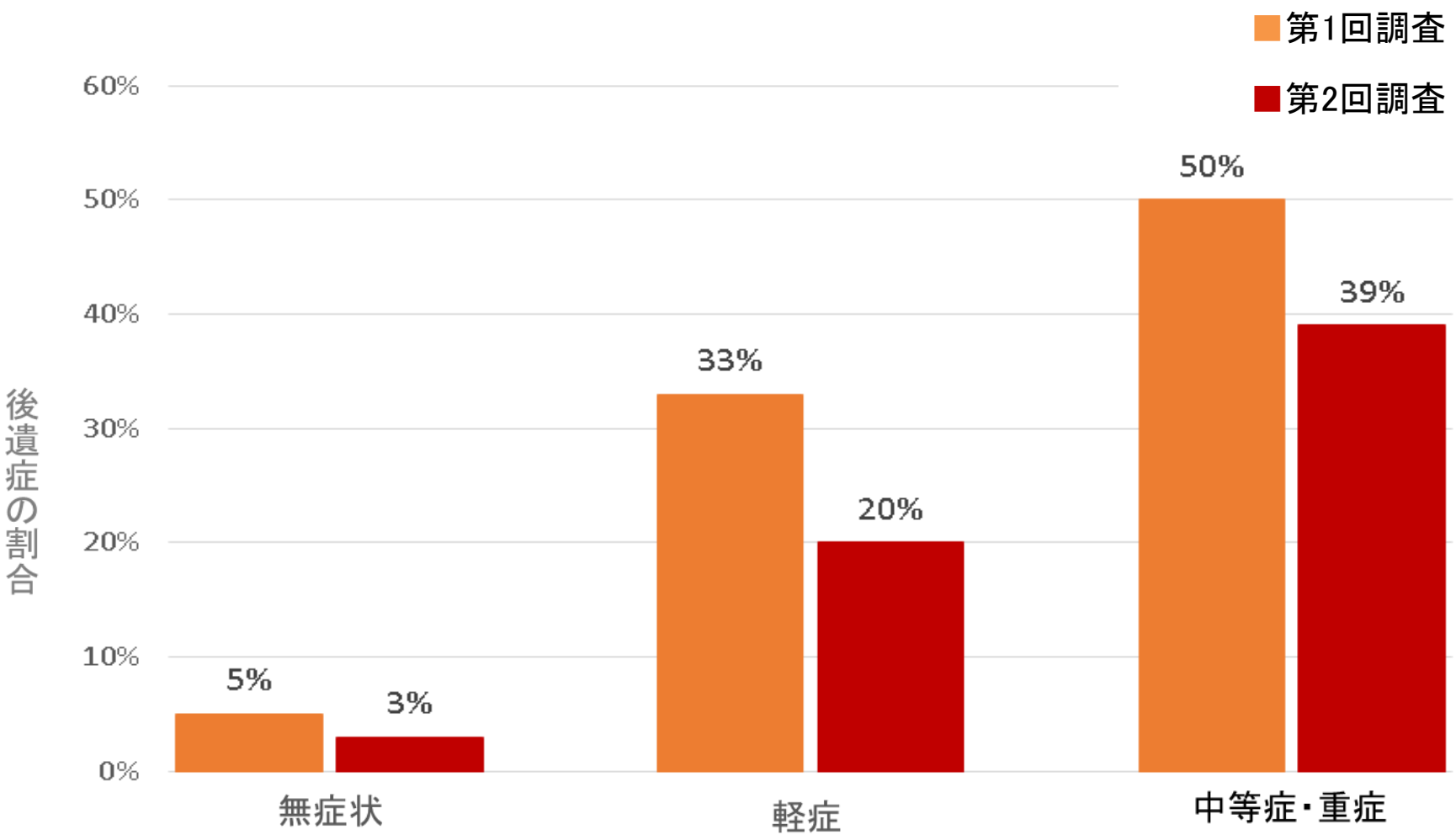
○ また，年代による後遺症がある方の割合の差は，第1回に比べ，小さい結果であった。



各年代において，性別による後遺症化率の違いはなかった。

後遺症を有する人の傾向（感染時の重症度）

○ 両調査で，感染時に「中等症・重症」であった方が，後遺症を感じる割合は高い結果であった。

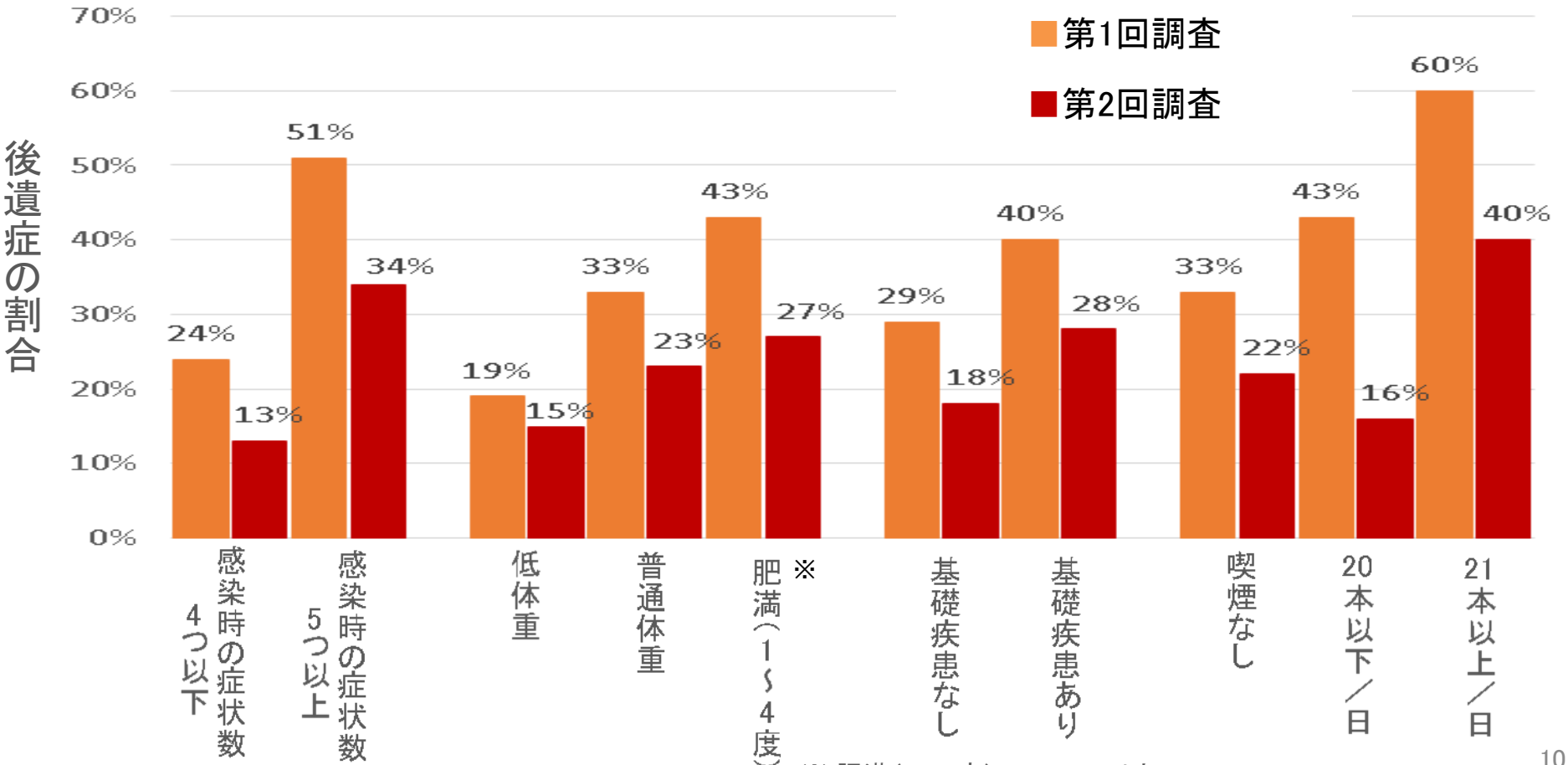


※ 感染時に無症状でも，療養解除後に発現した症状：倦怠感，せき，食欲不振，集中力低下，抑うつ等

後遺症を有する人の傾向（その他）

○ 感染時の症状数が5つ以上ある方や基礎疾患がある方は，両調査で後遺症がある方の割合が高くなる結果であったが，第1回調査に比べ，症状数が少ない方等との割合の差は小さい結果であった。

○ また，体型や喫煙の有無では，第2回調査では有意差が認められなかった。

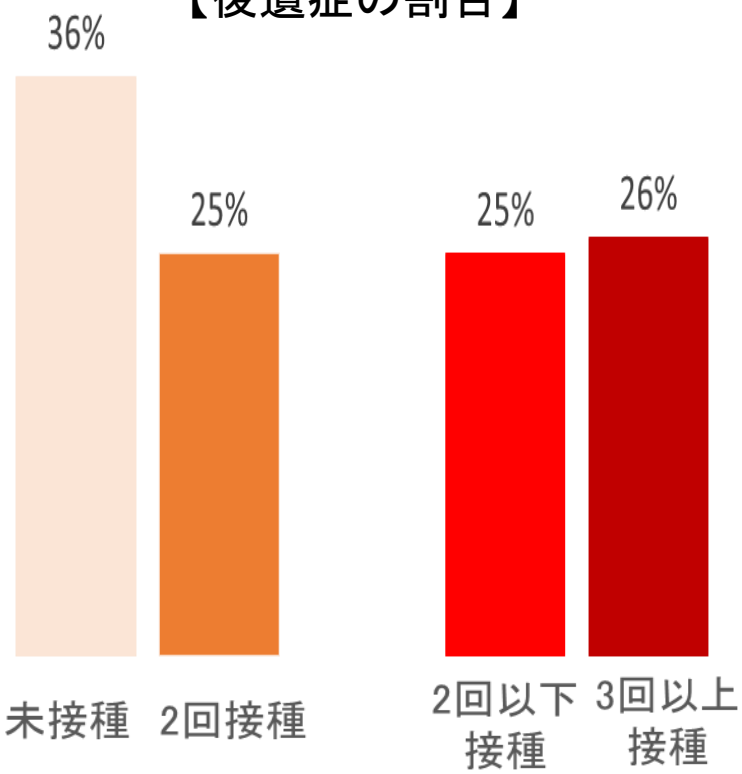


※ 肥満（1～4度）：BMI 25 以上

ワクチン接種の状況と経過①

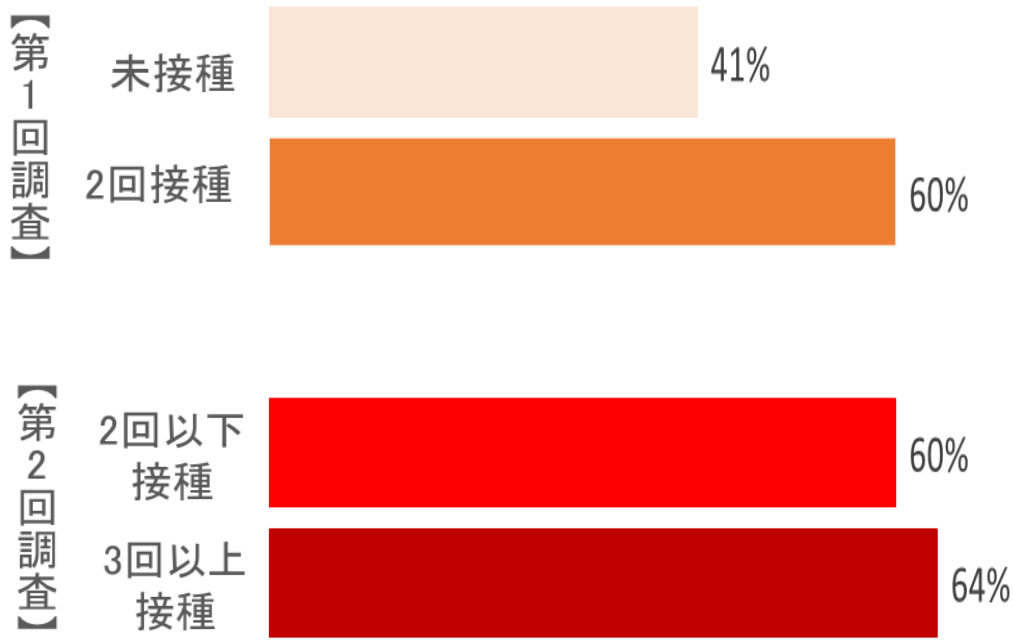
○ 感染前のワクチン接種により，後遺症がある方の割合及び半年以内に症状が改善した割合は，第1回調査では，有意差が認められたが，第2回調査では有意差は認められなかった。これは，第2回調査では，後遺症自体の割合が低くなっていること，ワクチンの接種時期と感染時期との間隔にばらつきがあることが考えられる。また，その他要因等は，第2回調査回答のみでは分析できなかった。なお，第1回と第2回を比較するため，10代以下の結果は抽出していない。

【後遺症の割合】



【第1回調査】　【第2回調査】

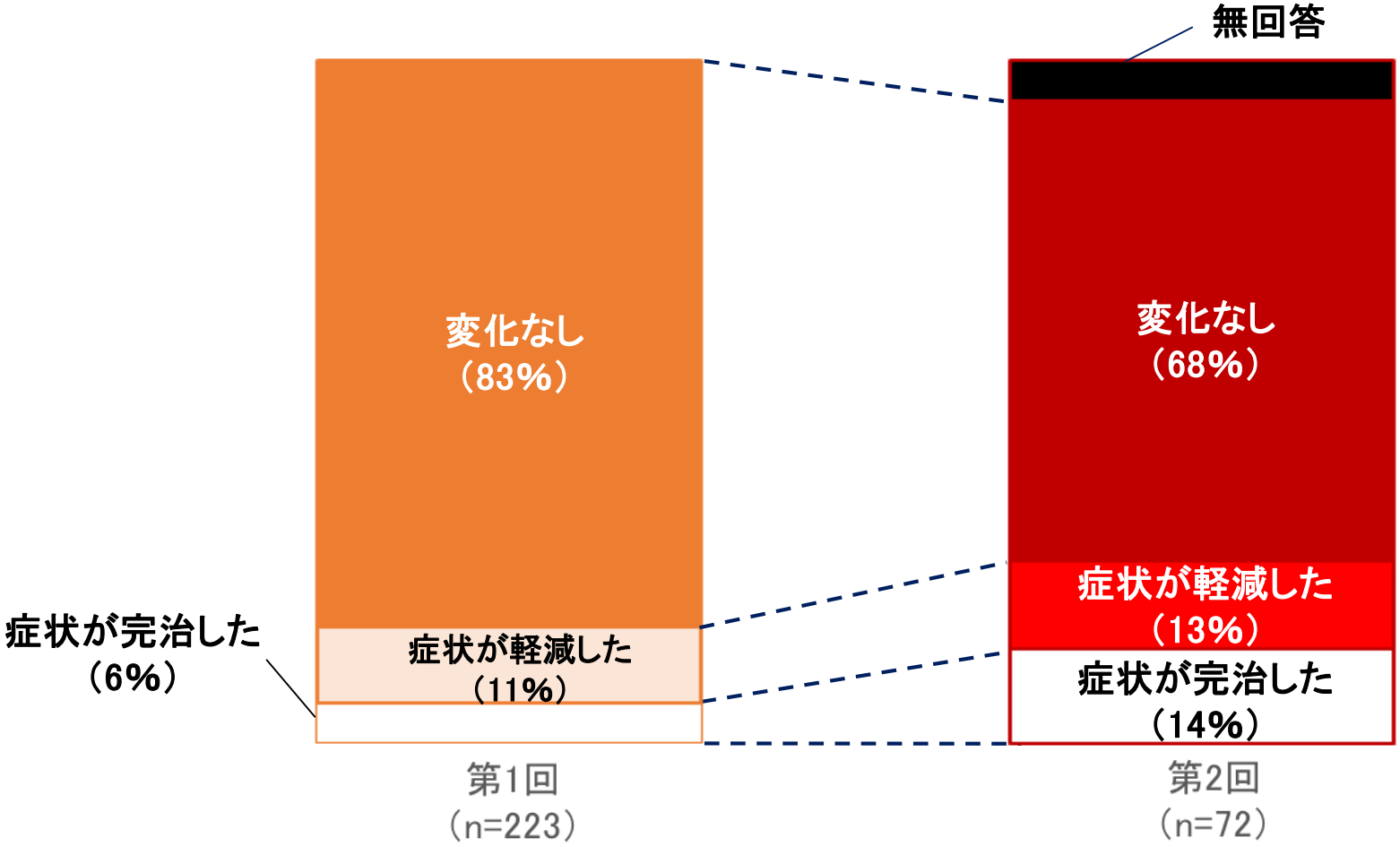
【半年以内に後遺症が改善した割合】



ワクチン接種の状況と経過②

○ 感染後のワクチン接種による後遺症の症状の変化については，第1回調査に比べ，第2回調査の方が，症状が改善した割合は高い結果であった。

【退院・療養解除後（感染後）のワクチン接種の効果】



まとめ

第１回調査（アルファ株・デルタ株が主流）と比較するため，第２回調査（オミクロン株が主流）を行った。

○ 第１回調査に比べて，第2回調査の方が，後遺症がある割合が低くなり，後遺症により社会生活への影響がある方の割合も低くなっている。

○ また，複数の症状を感じる方の割合が低くなり，後遺症が早く改善する割合は高くなっているが，後遺症が長期間続く方は，第１回調査と同様一定程度いる。

○ 症状は，呼吸器症状を感じる方の割合が高くなり，全身症状や精神・神経症状などの症状については低くなっている。

○ 感染後のワクチン接種により，後遺症が改善する割合は高くなっているが，感染前のワクチン接種による後遺症がある方の割合については，第１回調査のような低減効果は認められなかった。

（ワクチン接種による後遺症の割合について，第2回調査では後遺症自体の割合が低くなっていること，接種時期と感染時期との間隔にばらつきがあることが考えられる。
また，第2回調査回答のみではその他の要因等が分析できなかった。）